

宮古市立崎山中学校3年

まえかわ かおる
前川 郁

僕は生まれつき視覚障害がある。

小さな頃から「見える」と「見えない」の間を行き来し、ぼんやりとする視界、見えそうでどうしても見えない世界にとまどいながらも、今まで過ごしてきた。

そんな僕は、色々な存在に支えられることによって、生活できている。家族やクラスメイト、そして様々な道具達が挙げられる。

拡大教科書は、小学校一年生の頃からお世話になっている。小さな文字が見えない僕は、文字や資料がはっきりと大きく載っているこの教科書を使うことで、みんなと同じ教室で、授業を受けることができている。

みんなと同じ環境で授業を受ける際に、もう一つ欠かせない道具が単眼鏡だ。長さ八センチメートルほどのそれは、遠くのものが見えない僕の目となり、黒板の字を読み取る手助けをしてくれる。使い慣れた今では、まるで体の一部のように扱える。

他にも、光に弱い僕の目に合わせて特別に作ってもらった眼鏡。慣れない道や、初めての場所を歩く時などに、様々な用途で活躍してくれる白杖。

たくさんの道具が僕を支えてくれていて、一つ一つが「相棒」のような大切な存在である。そんな道具達が税金でできていると耳にしたのは、つい最近のことだ。

それは、ある日母が言った一言がきっかけだった。

「あんたが今、拡大教科書や単眼鏡を使えているのは、みんな税金のおかげなんだから、たくさんの人に感謝しなきゃいけないよ。」

と言われ、初めて知ったのだ。視覚障害者である僕が、今までみんなと同じ教室で勉強したり、行事や部活に積極的に参加でき、みんなと同じように、泣いて笑って、充実した学校生活を送ることができているのが、税金のおかげだと思うと、感謝してもしきれない。

また同時に「とても心強いな」とも思った。まるで、僕の背中を押してくれる、応援団がいるような気分になったからである。

そんな応援にこたえるために、

「自分には何ができるだろう？」

と、必死で考えた。そして、その答えは「勉強すること」に至った。

理由は二つある。まず、僕の学校生活を支えてくれていることに感謝し、そのことに純粹に応えるため。

そして、その学びが未来へのバトンとなり、夢へ向かってつき進む力となると信じているからである。さらにその先には、税金を払う立場となり、将来生まれてくるかもしれない、同じ境遇の子供達を支えてあげようと、決心した。

税金は障害者と健常者、そして過去と未来を繋ぐバトンのようなものだと僕は感じた。バトンを繋いでくれる人がこれからもたくさん増えていき、自分もその一員となり、新たな世代に繋ぐ、立派なランナーになりたい。